

エッジイデアルの代数的性質

木村 杏子 (静岡大学理学部数学科)

サイエンスカフェ in 静岡

第 140 話 2019 年 11 月 7 日 (木)

エッジイデアルとは？

- グラフから生ずるイデアル.
- イデアル ??… 環論的対象.
- 環 ???

代数的性質

- 剰余環の性質
 - Cohen–Macaulay
 - unmixed
 - sequentially Cohen–Macaulay
 - ...
- エッジイデアルの極小自由分解
 - ベッチ数
 - 射影次元
 - (Castelnuovo–Mumford) regularity
 - ...

本日のお品書き

- 第一部 (18:00 – 18:40)
 - 可換環 R と R -加群
 - R -加群の極小自由分解
 - 可換環のイデアル, 剰余環
- 休憩 (18:40 – 18:50)
- 第二部 (18:50 – 19:30)
 - 有限単純グラフのエッジイデアル

環とは …

和・差・積の定義された集合を **環** という。

例. 次の集合は環である。

- \mathbb{Z} : 整数全体の集合.
- \mathbb{R} : 実数全体の集合.
- \mathbb{C} : 複素数全体の集合.
- \mathbb{Q} : 有理数全体の集合.

特に, $\mathbb{R}, \mathbb{C}, \mathbb{Q}$ においては, (0 で割ることを除く) 商もある. このような集合を **体** という。

★ 環の例.

例. K を体とし, n を 1 以上の整数とする.
次の集合は環である.

- $\text{Mat}_n(K)$: K を成分とする n 次行列全体の集合.
- $K[x]$: K 上の 1 変数多項式環.
- $K[x_1, \dots, x_n]$: K 上の n 変数多項式環.

注意. $\text{Mat}_n(K)$ において, 積の可換律は成り立たない:

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{pmatrix},$$
$$\begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 1 & 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 \\ 2 & 0 \end{pmatrix}.$$

ここでは可換環のみを扱うことにする.

★ R -加群.

ベクトル空間から始めよう.

K : 体.

V : K 上のベクトル空間.

…和と K 倍が定義された集合.

V が有限次元のとき, V には **基底** が存在する.

e_1, \dots, e_n が V の **基底** とは, V のどの元 v も,

$$v = c_1 e_1 + \dots + c_n e_n, \quad c_1, \dots, c_n \in K$$

の形に一意的に表せるときにいう.

e_1, \dots, e_n が V の **基底** であることは, 次の 2 条件が成り立つことと同値である:

- e_1, \dots, e_n は **一次独立** である. すなわち,

$$c_1e_1 + \dots + c_n e_n = 0 \implies c_1 = \dots = c_n = 0;$$

- e_1, \dots, e_n は V を張る (**生成する**). すなわち, V のどの元 v も,

$$v = c_1e_1 + \dots + c_n e_n, \quad c_1, \dots, c_n \in K$$

の形に表せる.

V の (空でない) 部分集合 W で, V における和と K 倍について閉じているものを V の **部分空間** という.

★ 有限次元ベクトル空間の例.

$K = \mathbb{R}, V = \mathbb{R}^3$:

$$\mathbb{R}^3 = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} : x, y, z \in \mathbb{R} \right\}.$$

$\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ は \mathbb{R}^3 の基底である.

$\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ が \mathbb{R}^3 の基底であること:

\mathbb{R}^3 の任意の元 $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ は

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = x \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + y \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + z \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と表せる。また、この表し方は一意的である。

問題. \mathbb{R}^2 の部分集合はいつ部分空間になるか.

\mathbb{R}^3 の部分空間の例:

$$\mathbf{W}_1 = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 : z = 0 \right\} = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ 0 \end{pmatrix} : x, y \in \mathbb{R} \right\}.$$
$$\mathbf{W}_2 = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^3 : x = y = 0 \right\} = \left\{ \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ z \end{pmatrix} : z \in \mathbb{R} \right\}.$$

★ R -加群.

R が環のとき, ベクトル空間の定義と同様に, R -加群 M を考えることができる (体 $K \longrightarrow$ 環 R).

M : R -加群…和と R 倍の定義された集合.
部分 R -加群も同様に定義される.

★ R -加群の例.

例. $R = \mathbb{Z}$ とするとき, $M = \mathbb{R}[x]$ は R -加群であり,
 $N = \mathbb{Q}[x]$ は M の部分 R -加群である.

R -加群の“基底”は？… 一般には存在しない。

基底の存在する R -加群は自由 R -加群と呼ばれる。
自由 R -加群を $\bigoplus R$ で表す。

例. \mathbb{R} 加群 \mathbb{R}^3 は自由 \mathbb{R} -加群である。

$$\mathbb{R}^3 = \mathbb{R}^{\oplus 3} = \mathbb{R} \oplus \mathbb{R} \oplus \mathbb{R}.$$

生成系 は存在する。

有限なものが存在するときには、有限生成 R -加群と呼ばれる。

$a_1, a_2, \dots, a_s \in M$ が R -加群 M を生成するとき、
 $M = Ra_1 + Ra_2 + \dots + Ra_s$ と表す。

有限生成自由 R -加群の場合:

$M = Ra_1 \oplus Ra_2 \oplus \cdots \oplus Ra_s$ なる a_1, \dots, a_s が存在する.

自由 R -加群はベクトル空間と同様に扱える
… 簡単なもの.

一般の R -加群は自由 R -加群にどれくらい“近い”か?
自由 R -加群で“近似”できないか?
… (極小)自由分解.

R は Noether 局所環であると仮定する.

M を R -加群とする.

このとき, M の極小自由分解が同型を除いて一意に定まる:

$$\cdots \xrightarrow{d_2} \bigoplus R^{\beta_1} \xrightarrow{d_1} \bigoplus R^{\beta_0} \xrightarrow{\epsilon} M \rightarrow 0.$$

- $\beta_i(M) := \beta_i$ を M の第 i ベッチ数 という.
- 極小自由分解の長さを M の射影次元 といい, $\text{pd}_R(M)$ で表す. (極小自由分解の長さが有限でないときは, $\text{pd}_R(M) = \infty$ と定める.)

自由 R -加群 $M = R^{\oplus s}$ の極小自由分解は

$$0 \rightarrow R^{\oplus s} \rightarrow M \rightarrow 0.$$

注意. 一般には, 射影分解を考えることになる.
ベッチ数や射影次元は同様に定義される.

★ イデアル.

環 R 自身は R -加群である.

R の部分 R -加群を **イデアル** という.

以下, I を環 R のイデアルとする.

イデアルが有限生成のとき, 有限生成イデアルという.

イデアル I が $a_1, a_2, \dots, a_s \in I$ で生成されるとき,
 $I = (a_1, a_2, \dots, a_s)$ で表す.

★ イデアルの例.

例. 整数環 \mathbb{Z} を考えよう.

\mathbb{Z} のイデアルは, どのようなものがあるか?

m を (0 以上の) 整数とすると, (m) は \mathbb{Z} のイデアル.

$((m)$ は m の倍数全体の集合である. 例えば,

$$(5) = \{\dots, -15, -10, -5, 0, 5, 10, 15, \dots\}.)$$

実は, \mathbb{Z} のイデアルは, このようなのものに限られる.

(\mathbb{Z} の 0 でない任意のイデアルは, それに含まれる最小の正の整数で生成される.) 例えば, $(6, 10) = (2)$.

一般に, $(m_1, \dots, m_s) = (\gcd\{m_1, \dots, m_s\})$.

例. S を, 体 K 上の n 変数多項式環とする.

● $n = 1$ のとき ($S = K[x]$):

S の任意のイデアル I は, ただ一つのもので生成される. ($I \neq 0$ のとき, I は, I に含まれる 0 でない多項式のうち, 次数最小のもので生成される.)

● $n \geq 2$ のとき ($S = K[x_1, \dots, x_n]$):

S のイデアルは, 一つのもので生成されるとは限らない (例えば, $I = (x_1, x_2)$) が, **有限生成** であることはいえる (Hilbert の基底定理).

これは, S が **Noether 環** であることを意味する.

多項式環のイデアルが単項式で生成されるとき、
それを **単項式イデアル** という。

特に、スクエアフリーな単項式で生成されるとき、
スクエアフリー単項式イデアル という。

例.

$x_2^3 x_3 x_6^2$... 単項式.

$x_1 x_3 x_4$... スクエアフリー単項式.

$(x_2 x_3^3, x_1 x_5 x_6, x_2^3 x_4^2)$... 単項式イデアル.

$(x_2 x_4 x_5, x_1 x_3, x_3 x_4 x_5, x_2 x_6)$
... スクエアフリー単項式イデアル.

★ 剰余環.

環 \mathbb{Z} とそのイデアル (5) を考えよう.

任意の整数は, 5 で割った余りで分類される:

$$\text{余り } 0: \dots, -10, -5, 0, 5, 10, \dots \quad \cdots \quad \bar{0}.$$

$$\text{余り } 1: \dots, -9, -4, 1, 6, 11, \dots \quad \cdots \quad \bar{1}.$$

$$\text{余り } 2: \dots, -8, -3, 2, 7, 12, \dots \quad \cdots \quad \bar{2}.$$

$$\text{余り } 3: \dots, -7, -2, 3, 8, 13, \dots \quad \cdots \quad \bar{3}.$$

$$\text{余り } 4: \dots, -6, -1, 4, 9, 14, \dots \quad \cdots \quad \bar{4}.$$

$$\overline{-1} = \bar{4}, \quad \overline{-2} = \bar{3}, \quad \overline{-3} = \bar{2}, \quad \bar{6} = \bar{1}, \quad \bar{5} = \bar{0}, \dots$$

のようにして, 5 で割った余りが同じものを“同一視”する.

5 で割った余りが同じものを“同一視”することで、新たな集合ができる:

$$\begin{aligned}\mathbb{Z}/(5) &:= \{\bar{m} : m \in \mathbb{Z}\} \\ &= \{\bar{0}, \bar{1}, \bar{2}, \bar{3}, \bar{4}\}.\end{aligned}$$

$\mathbb{Z}/(5)$ は次の演算により環になる:

$$\text{和: } \bar{m} + \bar{n} := \overline{m + n}.$$

$$\text{積: } \bar{m} \cdot \bar{n} := \overline{mn}.$$

★ $\mathbb{Z}/(5)$ の演算表を作ってみよう.

| | + | $\bar{0}$ | $\bar{1}$ | $\bar{2}$ | $\bar{3}$ | $\bar{4}$ |
|---|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 和 | $\bar{0}$ | | | | | |
| | $\bar{1}$ | | | | | |
| | $\bar{2}$ | | | | | |
| | $\bar{3}$ | | | | | |
| | $\bar{4}$ | | | | | |
| | · | $\bar{0}$ | $\bar{1}$ | $\bar{2}$ | $\bar{3}$ | $\bar{4}$ |
| 積 | $\bar{0}$ | | | | | |
| | $\bar{1}$ | | | | | |
| | $\bar{2}$ | | | | | |
| | $\bar{3}$ | | | | | |
| | $\bar{4}$ | | | | | |

★ 剰余環.

R を環とし, I を R のイデアルとする.

集合 $R/I := \{\bar{a} : a \in R\}$ を考えよう. ただし,

$$\bar{a} = \bar{b} : \stackrel{\text{def}}{\iff} a - b \in I.$$

R/I は, 次の演算により環となる
(これを 剰余環 という):

$$\text{和: } \bar{a} + \bar{b} := \overline{a + b}.$$

$$\text{積: } \bar{a} \cdot \bar{b} := \overline{ab}.$$

R/I には自然に R -加群の構造も入る.

★ 多項式環の斉次イデアル.

S を体 K 上の n 変数多項式環とする.

多項式 f について, f に現れる単項式がすべて同じ次数のとき, f は斉次多項式といわれる.

S のイデアル I は, 斉次多項式で生成されるとき斉次イデアルといわれる.

I が斉次イデアルのとき, S/I には **次数付環** の構造が入る: $S/I = \bigoplus_{\sigma \in \mathbb{Z}^n} (S/I)_{\sigma}$.

● S 自身も次数付環である.

S は一般に局所環ではないが, 次数付極大イデアルはただ一つである: $\mathfrak{m} = (x_1, \dots, x_n)$. このことから, S/I の (次数付) 極小自由分解を考えることができる.

S/I の次数付極小自由分解:

$$0 \rightarrow \bigoplus_{\sigma \in \mathbb{Z}^n} S(-\sigma)^{\beta_{p,\sigma}} \rightarrow \cdots \rightarrow \bigoplus_{\sigma \in \mathbb{Z}^n} S(-\sigma)^{\beta_{1,\sigma}} \rightarrow S \rightarrow S/I \rightarrow 0.$$

- $\beta_{i,\sigma}(S/I) := \beta_{i,\sigma}$: S/I の次数付 **ベッチ数**.
- p (極小自由分解の長さ):
 S/I の **射影次元**, $\text{pd}_S(S/I)$ で表す.
(Hilbert の syzygy 定理から長さ有限である.)
- $\text{reg}(S/I) := \max\{|\sigma| - i : \beta_{i,\sigma}(S/I) \neq 0\}$:
 S/I の (**Castelnuovo–Mumford**) **regularity**.

ただし, $\sigma = (\sigma_1, \dots, \sigma_n)$ のとき,

$$|\sigma| := \sigma_1 + \cdots + \sigma_n.$$

★ エッジイデアル

$G = (V(G), E(G))$: 有限単純グラフ.

$V = V(G)$: G の頂点集合. ($\#V = n$.)

$E(G)$: G の辺集合.

$S = K[v : v \in V](= K[x_1, \dots, x_n])$:

体 K 上の多項式環.

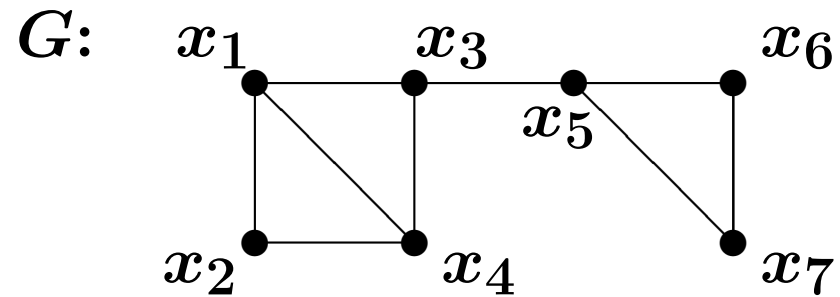
● G の エッジイデアル:

$$I(G) = (uv : \{u, v\} \in E(G)) \subset S.$$

- G の エッジイデアル:

$$I(G) = (uv : \{u, v\} \in E(G)) \subset S.$$

- 例



$$I(G) = (x_1x_2, x_1x_3, x_1x_4, x_2x_4, x_3x_4, \\ x_3x_5, x_5x_6, x_5x_7, x_6x_7).$$

問題. ベッチ数や射影次元, regularity をグラフの言葉で記述せよ.

注意. 一般には体の標数によるため, これは不可能である.

どうするか ...

- グラフ G が良い性質をもつ場合について考える.
- $S/I(G)$ が良い性質をもつグラフについて考える.

良い性質 ???

★ 環の性質.

- $S/I(G)$ が Cohen–Macaulay.
- $I(G)$ が unmixed.
- $S/I(G)$ が sequentially Cohen–Macaulay.

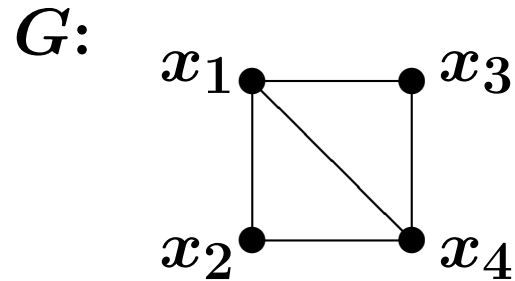
上のそれぞれについて,

- G が Cohen–Macaulay.
- G が unmixed.
- G が sequentially Cohen–Macaulay.

ということにする.

★ イデアルの高さと unmixed 性.

例.



$$\begin{aligned} I(G) &= (x_1x_2, x_1x_3, x_1x_4, x_2x_4, x_3x_4) \\ &= (x_1, x_4) \cap (x_1, x_2, x_3) \cap (x_2, x_3, x_4). \end{aligned}$$

- $I(G)$ の高さ: $\text{height } I(G) = 2$.
- unmixed でない.

★ G の unmixed 性 … グラフの言葉で.

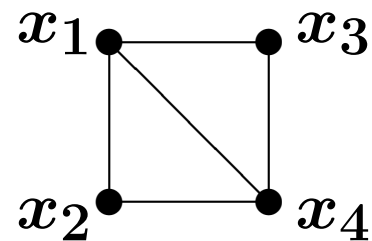
G が unmixed

$\iff G$ の **minimal vertex cover** の濃度が一定

$\iff G$ の **maximal independent set** の濃度が一定.

例.

G :



$$\begin{aligned} I(G) &= (x_1x_2, x_1x_3, x_1x_4, x_2x_4, x_3x_4) \\ &= (\mathbf{x_1, x_4}) \cap (\mathbf{x_1, x_2, x_3}) \cap (\mathbf{x_2, x_3, x_4}). \\ &\qquad\qquad\qquad \mathbf{x_2, x_3} \qquad\qquad\qquad \mathbf{x_4} \qquad\qquad\qquad \mathbf{x_1} \end{aligned}$$

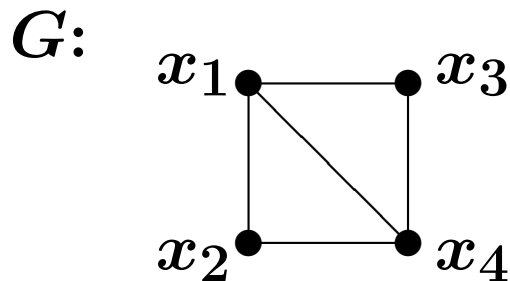
$S/I(G)$: Cohen–Macaulay

$$:\stackrel{\text{def}}{\iff} \text{height } I(G) = \text{pd}_S S/I(G).$$

注意.

- 一般には $\text{height } I(G) \leq \text{pd}_S S/I(G)$.
- unmixed かつ sequentially Cohen–Macaulay
 \iff Cohen–Macaulay.

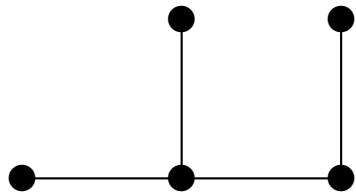
先の例のグラフ G は sequentially Cohen–Macaulay.



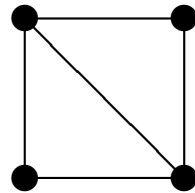
★ 良い性質のグラフ.

- 木 (サイクルをもたない連結なグラフ).
- 弦グラフ.
- 二部グラフ.

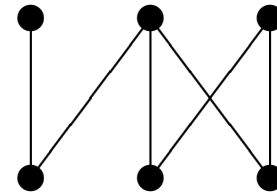
木:



弦グラフ:



二部グラフ:



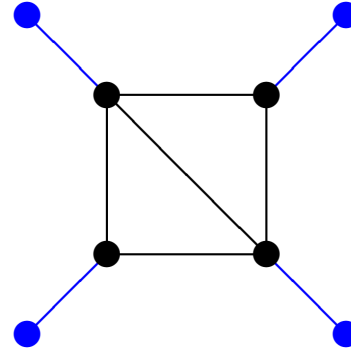
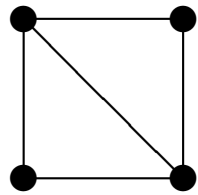
注意. 木は弦グラフである.

★ 何が知られているか.

- 任意の whiskered graph は Cohen–Macaulay (Villarreal, 1990).
- 弦グラフは sequentially Cohen–Macaulay (Francisco and Van Tuyl, 2007).
- Cohen–Macaulay 二部グラフの特徴づけ (Herzog and Hibi, 2005).
- unmixed 二部グラフの特徴づけ (Villarreal, 2007).
- sequentially Cohen–Macaulay 二部グラフの構造に関する研究 (Van Tuyl and Villarreal, 2008).

★ whiskered graph.

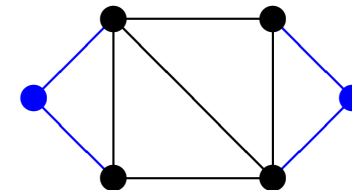
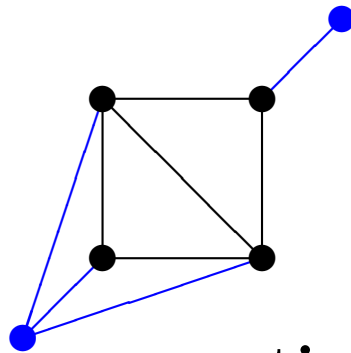
任意のグラフ



whiskered graph

Cohen–Macaulay (Villarreal)

clique vertex-partition 上に whisker をとる



sequentially Cohen–Macaulay
(Cook II and Nagel, 2012)

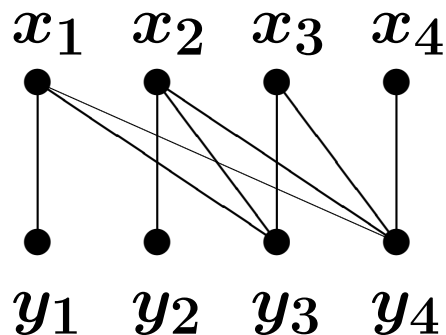
★ Cohen–Macaulay 二部グラフの特徴づけ.

定理 (Herzog and Hibi, 2005).

G を孤立点のない二部グラフとする.

G が Cohen–Macaulay であるための必要十分条件は、次を満たす $V(G)$ の bipartition $V(G) = \{x_1, \dots, x_h\} \sqcup \{y_1, \dots, y_h\}$ があることである:

- (i) $\{x_k, y_k\} \in E(G)$ ($k = 1, \dots, h$).
- (ii) 相異なる i, j, k について,
 $\{x_i, y_j\}, \{x_j, y_k\} \in E(G) \implies \{x_i, y_k\} \in E(G)$.
- (iii) $\{x_i, y_j\} \in E(G) \implies i \leq j$.



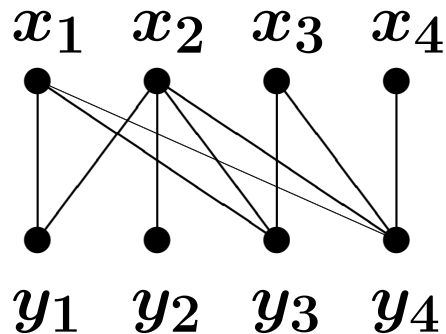
★ unmixed 二部グラフの特徴づけ.

定理 (Villarreal, 2007).

G を孤立点のない二部グラフとする.

G が unmixed であるための必要十分条件は, 次を満たす $V(G)$ の bipartition $V(G) = \{x_1, \dots, x_h\} \sqcup \{y_1, \dots, y_h\}$ があることである:

- (i) $\{x_k, y_k\} \in E(G)$ ($k = 1, \dots, h$).
- (ii) 相異なる i, j, k について,
 $\{x_i, y_j\}, \{x_j, y_k\} \in E(G) \implies \{x_i, y_k\} \in E(G)$.

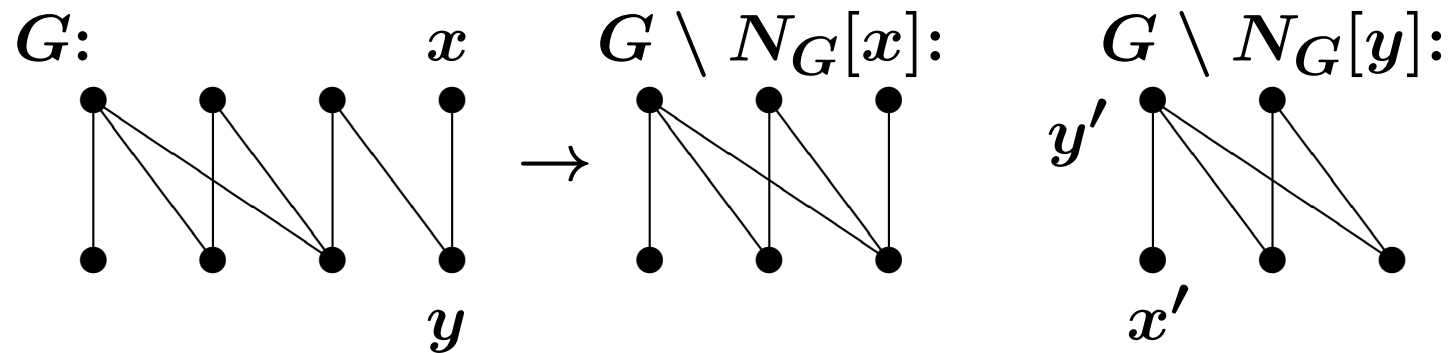


★ sequentially Cohen–Macaulay 二部グラフ.

定理 (Van Tuyl and Villarreal, 2008).

二部グラフ G が sequentially CM であるための必要十分条件は, 次を満たす辺 $\{x, y\}$ が存在すること:

- $\deg(x) = 1$.
- $G \setminus N_G[x]$ と $G \setminus N_G[y]$ は sequentially CM.

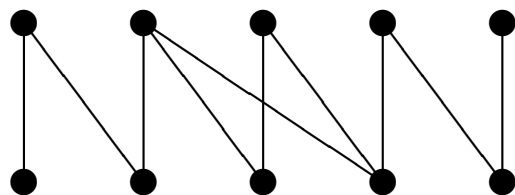


★ 極小自由分解について知られていること.

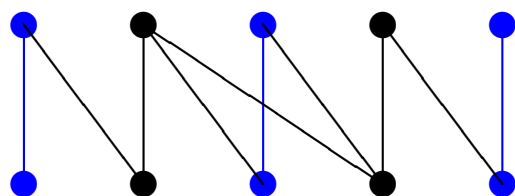
- $I(G)$ が linear resolution をもつ \iff
 $\text{reg}(S/I(G)) = 1 \iff \overline{G}$ が弦グラフ
(Fröberg, 1990).
- induced matching number が regularity の下限
となること (Katzman, 2006).
- Cohen–Macaulay 二部グラフの極小自由分解の特
徴づけ (Herzog and Hibi, 2005).
- unmixed 二部グラフの極小自由分解の特徴づけ
(Mohammadi and Moradi, 2015).

★ 誘導マッチング数 $\text{indmatch}(G)$.

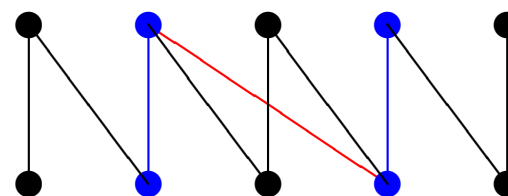
G :



$$\text{indmatch}(G) = 3$$



誘導マッチング



×

定理 (Katzman, 2006).

$$\text{indmatch}(G) \leq \text{reg } S/I(G).$$

一般に, 等号は成立しない (例: 5角形グラフ).

定理.

次のグラフ G について, $\text{indmatch}(G) = \text{reg } S/I(G)$ が成り立つ.

- (1) 木 (Zheng, 2004).
- (2) 弦グラフ (Hà and Van Tuyl, 2008).
- (3) unmixed 二部グラフ (Kummini, 2009).
- (4) sequentially Cohen–Macaulay 二部グラフ (Van Tuyl, 2009).
- (5) very well-covered グラフ (Mahmoudi, Mousivand, Crupi, Rinaldo, Terai, and Yassemi, 2011).

★ ベッチ数の非消滅定理 (K, 2012, 2016).

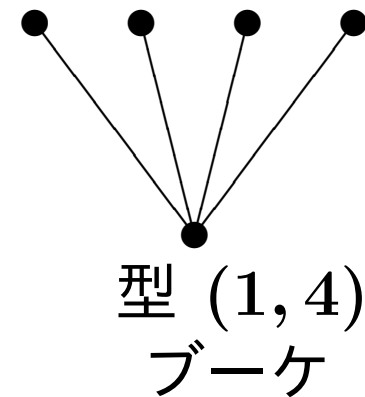
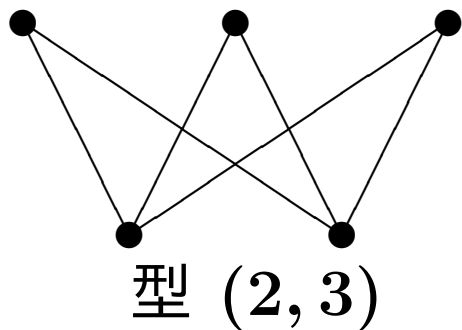
G を $V = V_1 \sqcup V_2$ 上の二部グラフとする.

G : 型 $(\#V_1, \#V_2)$ の完全二部グラフ

$:\stackrel{\text{def}}{\iff}$ 任意の $x_1 \in V_1, x_2 \in V_2$ に対し $\{x_1, x_2\} \in E(G)$.

型 $(1, n)$ の完全二部グラフをブーケという.

例.



定理 ([K, 2016]).

G を V 上の有限単純グラフとする.

G の完全二部部分グラフ B_1, \dots, B_r で次を満たすものが存在するとする:

(C1) $k \neq \ell$ に対し $V(B_k) \cap V(B_\ell) = \emptyset$.

(C2) $e_k \in E(B_k)$ $k = 1, \dots, r$ で, e_1, \dots, e_r が G の誘導マッチングとなるものが存在する.

このとき $\sigma = V(B_1) \cup \dots \cup V(B_r)$ とすれば

$$\beta_{|\sigma|-r, \sigma}(S/I(G)) \neq 0.$$

$V(\mathcal{B}) := \cup V(B_k)$ とおく.

★ ベッチ数の非消滅性の特徴付け.

定理 ([K, 2012]).

G を V 上の弦グラフとする.

このとき, $\beta_{i,\sigma}(S/I(G)) \neq 0$ であるための必要十分条件は, (C1), (C2) を満たす **ブーケ** の集合 \mathcal{B} で, $V(\mathcal{B}) = \sigma$ かつ $i = |\sigma| - |\mathcal{B}|$ を満たすものが存在することである.

さらに G が木のとき, この条件を満たすならば $\beta_{i,\sigma}(S/I(G)) = 1$ である.

★ 射影次元.

(寺井直樹氏と Siamak Yassemi 氏との共同研究)

定理 ([K, 2016], [K–Terai–Yassemi, 2018]).

G が very well-covered グラフのとき,

(G が very well-covered グラフのとき,)

$$\text{pd}(S/I(G)) = \max_{\mathcal{B}} \{ |V(\mathcal{B})| - |\mathcal{B}| \},$$

ただし, \mathcal{B} は (C1), (C2) を満たす完全二部部分グラフの集合をはしる.

★ 今後の展開 … グラフから超グラフへ.

グラフのときは 2 次生成,
これを一般のスクエアフリー単項式イデアルに拡張する.